

「待つからこそ見える成長の瞬間」

人ががんばり成長していく姿を目の当たりにできる。これが、私の思う教師という仕事の魅力です。以前は「できない」と言っていてうつむいていた子が、今は「楽しくて仕方ない」と言って、目の前で笑っている。こんなことが日常茶飯事です。

私が勤務する小学校の体育大会では、6年生になると一輪車パレードを行います。50名弱の子どもたちが、何にもつかまらず一輪車に乗り、等間隔を保ちながら音楽に合わせて円を描いたり、交差をしたり、手をつなぎながら風車を作ったりするのです。その演技は、ただただ圧巻です。しかし、そこに至るまでには様々な困難が存在します。50人いれば50通りの技術や体力の違いがあるのですから、それも当然です。気持ちの面でも、初めからやる気満々の子もいれば、いつまでたっても練習したからない子もいます。では、そんな子どもたちに、教師は何ができるのでしょうか。一緒に一輪車に乗って技術を教える？子どもたちの輪の中に入って「やるぞ」と発破をかける？それもあるでしょうが、私は「待つ」ことが大切だと考えています。なぜなら、目の前には、子ども自身が獲得してきた50通りの経験とアイデアという宝物があるのですから。乗り方を教えてしまうのではなく、まずは待つ、子どもたちを見る。誰かが動き出したら話し掛けて、思いや考えを聞いてみる。必要があれば、他の子どもたちと繋げてみる。すると、乗れない子にお手本を見せながら教え励ます子が出てきたり、隊列がよりきれいに見えるようにとアイデアを出し合うグループが出てきたりするのです。やがて、それが全体に広がって、いつの間にかみんなが生き生きとした顔で取り組んでいるのです。やらされているのではなく、自らしているからこそできるようになるし、楽しくなる。このことは、一輪車パレードに限らず、教科の授業でも同じことが言えます。

「待つ」ことで見えてくる「子どもが自ら動き出す瞬間」。これを逃さずに、一人一人がもっている素晴らしい宝物に気づかせ、そっとサポートをするときに、子どもの成長に関われたと感じる瞬間であり、私が思う教師の魅力です。